

難聴通級指導教室に通う児童の学級適応に関する研究

○大川 将貴 澤 隆史

(東京学芸大学大学院教育学研究科) (東京学芸大学)

KEY WORDS: 聴覚障害 学級適応 障害認識

1. 問題と目的

現在、通常学校に在籍している聴覚障害児童に対する、学習環境及び生活環境における合理的配慮については様々な見解があり、配慮の差異が聴覚障害児童の学級適応状態に様々な影響を与えていると考えられる。近年、新生児聴覚スクリーニングの普及に伴って、難聴通級指導教室に軽度障害あるいは聴覚活用の能力が高い児童が増加している。その結果、岩田(2014)が指摘したように児童自身の障害認識が不十分であることが予想される。本研究では、難聴通級指導教室に通っている児童・保護者・教員への意識調査を実施し、学級適応感における三者間での意識の差異について検討することを目的とした。

2. 方法

- 1) 対象者：難聴通級指導教室で指導を受けている小学生児童 17名 (1年生2人, 2年生5人, 3年生3人, 4年生4人, 6年生3人)。ならびに難聴通級指導教室の担当教員及び児童の保護者を対象とした。なお、教員と保護者については解答が困難な項目を除いて作成した。また、調査には教員及び保護者の了承を得て行った。
- 2) 質問項目：齋藤(2014)の質問項目を参考に、児童向けに修正した学級適応に関する項目 20 項目、学校生活に関する項目と障害認識に関する項目をそれぞれ3項目、1項目の計 24 項目を作成した。
- 3) 調査方法：児童に対しては個別に1対1の面接形式で調査を行った。教員と保護者に対しては、質問紙を配布し調査を行った。学級適応に関する質問項目のうち、4件法で回答を求めた9項目について適応良好～適応不良の回答に対して4点～1点の得点を与え、児童・教員・保護者毎に各項目の平均点を求め、その値の比較から分析した。

3. 結果

児童、教員、保護者の各項目の平均得点を低学年については図1に、高学年については図2にそれぞれ示した。図1より、①「先生の話がわかる」では三者間に大きな得点の差が示されなかった。しかし、②「先生と他の子の話がわかる」という第三者を含めた質問では、児童の得点が高く、教員の得点が低い結果であった。③「先生とリラックスして話せる」では児童と教員共に得点が高い結果であったが、④「先生に悩みを相談する」では、両者共に得点が低い結果であった。⑥「授業を理解している」では、児童の得点は高いが、教員の得点は児童と比べて低く、保護者の得点はさらに低い結果であった。⑧「友達と話す際の困り感」では、児童の得点は高く、保護者の得点は低い結果であった。

次に図2より、①では、児童の得点は高いが、教員と保護者は共に得点が低い結果であった。一方、②では、児童と教員共に得点が高かった。③では、児童と教員共に高い得点を示したが、④では児童の得点は同様に高いのに対し、教員は低い結果であった。⑥では、児童の

得点は高いが、教員と保護者は共に低い結果であった。⑧では、児童の得点は高く保護者の得点は低い結果であった。なお⑤「授業が好きである」、⑦「学級活動に積極的である」、⑨「学校を楽しんでいる」については三者間で顕著な差が示されなかった。

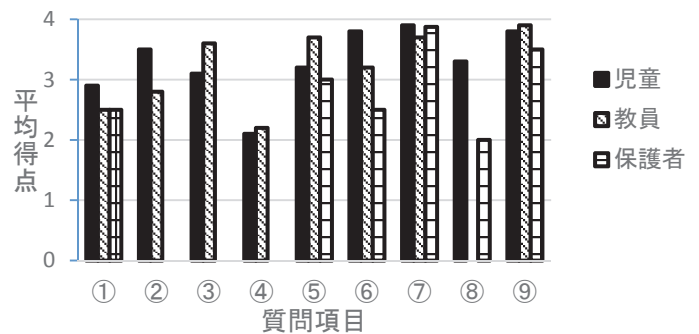


図1 低学年児童（10名）と教員・保護者の平均得点

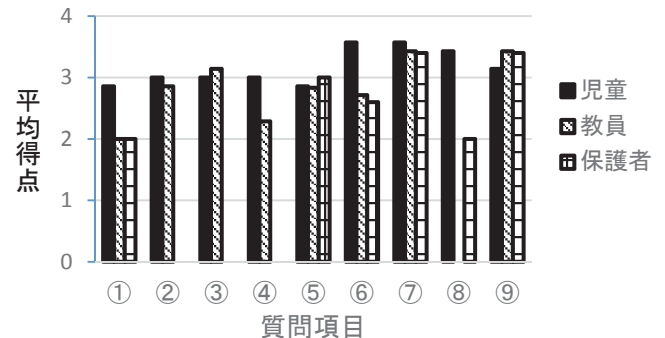


図2 高学年児童（7名）と教員・保護者の平均得点

4. 考察

「先生の話がわかる」等の言葉の聴取に関する質問において、三者間に意識の差異が存在し、児童は言葉の聴取に対して大きな問題意識を抱いていないのに対し、教員と保護者は不安を抱いていることが示された。このような言語聴取における評価の差異が、「友達と話す際の困り感」における児童と保護者の意識の差異にも反映していることが推察された。また「授業を理解している」では、低学年と高学年ともに共通して児童の得点が高い傾向が示された。一方、教員の評価では高学年での得点が低く、児童の授業内容の理解に対して十分でないことが示された。

文献：岩田吉生(2015)小学校に在籍する聴覚障害児の保護者の教育支援に関するニーズ調査 - 2014 年度・保護者に対する質問紙調査を通して - 障害児教育・福祉学研究, 11, 27-32. 齋藤友介(2014) 日本語版聴覚障害生徒向け参加尺度(CPQ)の開発, 大東文化大学紀要, 社会科学, 52, 111-121.

(OKAWA Masaki SAWA Takashi)